高野物語
加茂物語
土車
二人袖
鶴袖

へ13
3940
5

本源

近江縣物語巻之五

○石山寺

源の頼光朝臣と申せし名ハ。清和天皇の御支流にして。御祖父六孫王経基王よりぞ代々源氏を継りて。代々朝家の御守りとして忠勤をはげませる事なりし。此君武威の道のミならず。和哥の道をさへ好ませ給ひ。下をつかひ給ふ事。いとなさけふかくおはしければ。弓矢とるほどの者ハ。かゝる君の世におはしますハ。風の草を靡が如く。なびき従ひて。敵し奉る[illegible]盗賊國々におこりしかバ。[illegible]京都におはします王などいへるいきほひ武士をおほく従へて[illegible]此時御願望の事ありて。昨夜より石山寺にこもりおはせし[illegible]

門 へ13
號 3940
巻 5
冊號 五 雑 文
函 [illegible]

今日ハ客殿に入おハしまして、湖水を眺望ありて、ふと庭乃かたへにおくれたる櫻のなごりなく咲ほこれるを御覧じ、うちながめいらせ給ふぞ、かつらん山櫻とりわけしもかうつる時なるべし。いとゞ興じおはしまするをりから、めしつぎの侍御前にまかりて、安世まゐれるよしを申せバ、やがて御前にぞ召されける。安世御前にをとめかなひ出て、うやうやしく寒温を述て、かしこまれバ、頼光梅丸とめをつけたるひとかしらハ何ものぞとのたまへバ、安世答てまうす。さるハ此若者ハ幼き時より、おのれがもとに養ひ置て教へて、ゆひならひうまれつきちかしきものぞ。文武の道にいたるまでは君に推挙し奉り、ゆくゆくハ御家人の数にも加へさせ給はんとて、今日めしつれ参りてはべると申せバ、頼光ほゝゑませ給ひて、器量こそすぐれたれ、その者の姓ハいかに、名ハ何といへるぞと問せ給へバ、安世、これハ坂上を名のる姓に呼べども、實ハ本姓にてハあらず。名ハ梅丸とつきて候と聞ゆれバ、頼光うけたまはりて、安世よ時世の物語どもありさてさうろなれバ、皆の中より包みたる物より出なひて、これハ丹波國なる山賤のもちつたへける物とて、人のあやしむ鬼の角なりといひつたへたれども、いかゞあらん、海鑑定せよとて梅丸にさづけ給ふ。梅丸手にとりわけて、つくづく見て申けるハ、これハ角にてハさふらはず。西洋なる歐邏巴のあたりにて、歐兒狼徳と申所の、そこの海中に大きなる魚の、その魚の顎の上に生ひる一の牙にて、いと長き物にて、これハかりときゝさりたる

物と見ていとゝ申せど人〻魚の脊よかぢりの角めき
うる物あり事少も及ばぬとぞ梅丸が博識なるとぞ
頼光うなづきて此角につきて思ひ出る事あり書の泰誓
如崩其角といふ文あり人〻角わらべにて此文
ちとゝかゝ汝説ありやとのたまふ梅丸こたへて願ハ蹶と
通じ角ハ詩に所謂麟之角の角なるべく さらばと
ひらめを地よりつる事うしおげたる既よ文選よ受化而蹶
角と見て漢書よもさる文字見てゆゑと申せバ大きた
興よ入るひてとしたの疑ひ一時よひらけぬ角よつきてを猶
問べ記事あり萬葉集よ角のふくれとゝよ詞あり いら
なる物でしのゝまふちもいいまゞ覺悟仕りそひ但ふ考う

の女を喰りてゝ〻たる哥にてゆゑ角のふくれ男陰のこと
なるべくやともおげんひと申せどそハ不ぞひあひよりひ
いる詞もあゞやうに少ゆとてまひく梅丸が頓智をわえゞ
ちせるひろりさてれうつけのりくびわぎりて弓ハひくやと
のゝまゝを安世学問のいとあどにたきを射させてゆひ
きと申せどちとうゝだやとして傍なる弓矢とりて接け
のふ梅丸手にとり拜して庭よおりゝちて何をつゝまん月
うんといふぞりふー湖水ゝりゝこの羽をのして飛きたる
を見るひて何射ておとせとのゝまふ梅丸笑うちつゞひた
しねゝひゝさめてなもちるにけりやゝひゝさゝこハ庭おなた
はゝと落つゝ射ゝくゝ聲をあげてゆひる頼光殊よ

うめまつやすよ
梅丸安世よ
ともおりて
頼光の忍
ぶ事よりる所

近江県物語巻上

感じのひて飛鳥をかく射おとしつるハ宋代の養由基も
りひつべし手練のほどおそろしき迫よおぼえてうとましとの
まひて庭よおちくることちごと見やりのひくわをしぼりて射
ちをつるハ我あやまりなりかるいみじき夫場也てい
づくんぞ殺生をつる事大悪者の法覚じゆうんもかしこと
後悔のはけしき見てらしに梅丸頭をわげておのもと
其ちうつるくゆへども出詞でゆへをせひかくつるまりてゆ
但死せざるやうにいさう羽ぐひをぬひさる汁射てゆへをも
死ぬべくハおぼえゆをびとて走りうて矢をひきぬいるもを
鳥ハ羽うちて空さるものぼりてとび行りかるるこの事
にさへ遠ち慮りなりるとて人くこをりてほめのくり

けり頼光斜めうびぬじのひてうしの馬のかくたく
まれを庭よひき出さうせはてづくさねぬきくろひよ鰹一
ありそくて是ハ當坐のうり手物をとてのりりちりて仰せ
りるハおこしが如き物我郎等とすべきよわうびぬ公家へ
奏聞をとげて官爵ハ朝議にまかせん扨このうび
國くに蜂起せる賊等退治の宣旨蒙りるハ我ち
ちくせる藤原の保昌あそんなり日ごろ武さちてまろ
高嶋よこりりをる齊明を討とるべくと此比其支度
最中に辺保昌あそんよ従ひて賊徒を討とりて名をそ
むとハやとびやしの後梅丸うしありて申るハ齊明ハ
りくくこの敵ゆてゆ(でいうで)討とりたく存ゆを嬉しき事

を承りていそぎ加勢に加へ下さるべしと也。頼光我家人
尾張國にすめる者共にはよく綱がしつらひたれば彼等
ともに軍を起し攻のぼらんず。前後より相はさみ
て攻んには凶徒等をほろぼさんこと日をさゝるに及ば
ず。汝は内裏の守護にいとまなければ今より都へ帰り
なん。わどのは保昌朝臣の營に至りてともに軍に従ひ
出陣すべしとのたまふ。安世よろこびて梅丸にむかひて、
我はかしこのかへりがけに帰りて園生にも此由語り聞せて
悦ばせん。めでたく凱陣の時を待て対面すべし。とく
いとま申て安世はわかれて東路へ引わかる。梅丸は猶御前に
ありて、ほどなく軍の評定ありて、鎧うちきて馬

にうちのり。保昌あそんの館へはせ行けるが、かしこには保昌
待とりぬ。子細は頼光あそんの書簡にて承りぬ。此度
の朝敵といふは我弟保輔といふ者ならびに盗なる斎明
にて、彼等狼藉いたしければ人民窂籠して安き
事なし。これによりて其強に討手をこひうけ罷下り也。
されど計策おそくば成がたし。篝りさしもねんごろす
かゝるに梅丸も手をつくして御軍勢に加はりけれも。
たしかにそのほかりのかんで此役に立べきにてもなし
あひなるべき。よろこばしくこそおもひ。保昌梅丸を長押に
いざなひ、萬卒は得やすく、一将は得がたし。此辺我軍
を、たすけなんには、今度の合戦勝利うたがふべきにあらじ

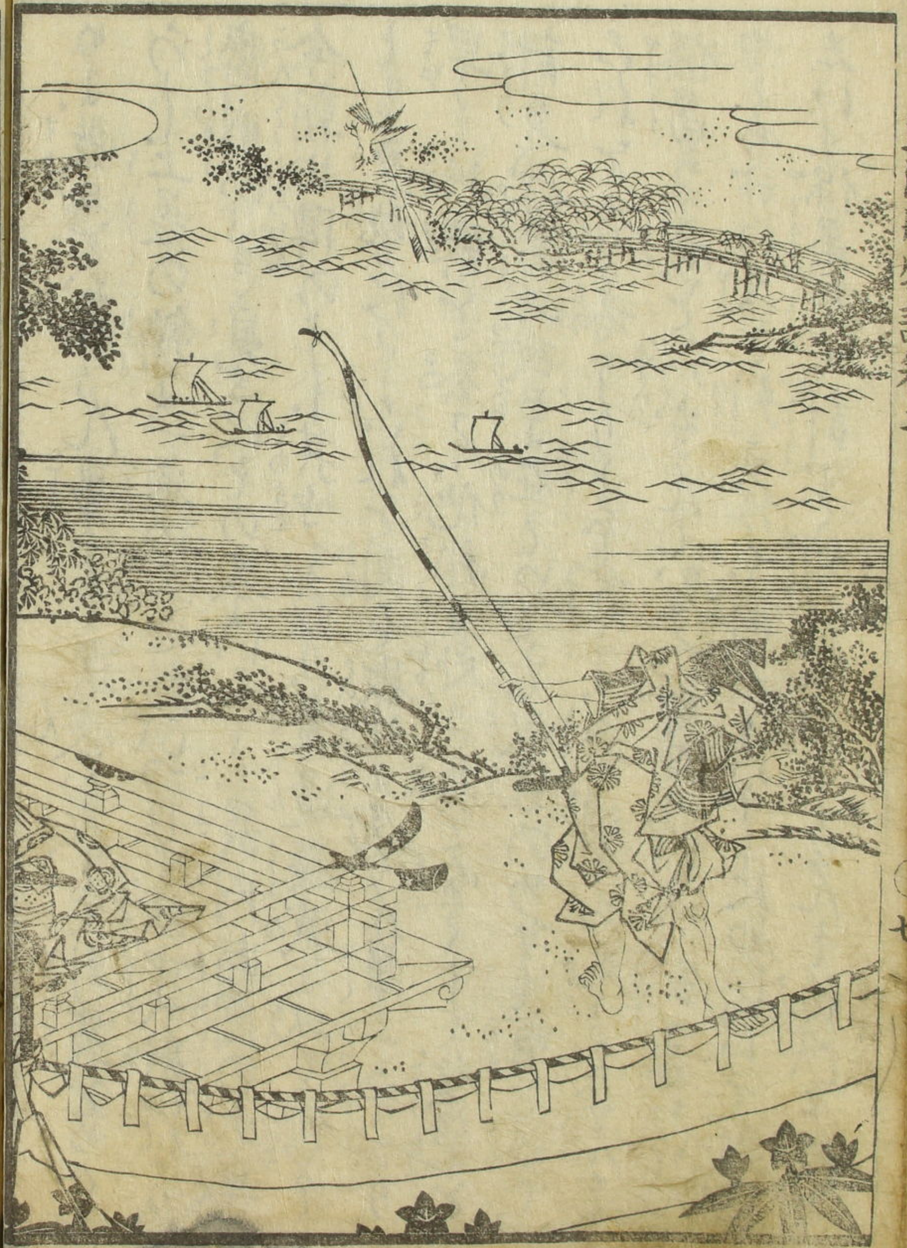
とて大きにうろたえて孟とり出くさぬくよきやくまゝ
ぬりそしりより保昌が軍勢催促するのひゞ爰よ止り
居て日をえゝて出陣をぞ待けれ

○田村將軍

けても藤原保昌朝臣は在京の武士四百余騎を引率
し・まづ齋明をうちとゝんと近江の國高嶋よりせ
りよとゝでぞ責たりける賊徒は山野を家とせる命
おゝびのわざ者なりしかども物とも世ひ無二之
三ふせぎられば戦ひ京家の武士共もすこし
いろめいてぞんとうける保昌此体を見て今度の討手
某乞求て孫向ひるかひもなくこゝばりち賊徒のさ

めよ数日をおゝん事こそ遺恨なれとて討策をめぐ
らし上差の鏑よ二通の文を結びつけて城中へ射入れり
齋明ひらき見るにその文よいとゝ五畿内諸國の大軍
今朝出陣のよし其ゆへあり貴邊猛威を以て御
もも多勢にゝたれを圍で敗北よ及ぶん事一定なり
早ゝ此寨を去ゝ他邦よ赴き生を全くして後榮を
計ゆへ保昌此攻口よ在といへども叔姪のちなみ有とて
たれを告る者なりとぞ書る齋明うち見るよりいんぶ
保昌めが我をうち出さんとはかるなりいで討まゐらん
やうとかの文を引さけゝ同くゝざにゆひつけて射返
たける保昌見て計で行はんずいるせんと稔ひとれを

梅九石山寺
にて弓を
射てゐる人不



梅丸すゝみ出て保昌が耳に口さしよせてかゝる計こそ候へ
といへバ保昌よろこびてさらバ貴所にまかせまゐらせんかし
さしもおほせの如くと云かへりてひそかに其計をぞ行ひ
けるさてその日もくるゝを待つけて戌の刻ともおぼしき比梅丸陣
中を出て齋明が柵に至り門外にたゝずみて鈴鹿の御陣
よりの御使に門をひらき給へといふ城中疑ひてためらふ所へ
梅丸かの焼ぢたるのれより出て門のまへのひまより投
入れしぞさてハ味方なりとてやがて門をひらきていれぬ梅丸
ハそれに申せとの御使なりといへバ齋明寝所によび入れて
對面す梅丸いひけるハ保輔かてハかならず柵をかこみて
守りのよべし一日のうちに我うち出て敵のうしろを襲べければ

其時うち出て戦ひのよべし左右よりたちまちてうたんといふ
保昌がかしらよりえん事代衣の物を探しなから安からん
かく乱軍の中にそのへでおほゆるの文ハまぎらはしとてかと
らうりたる紙より出てけるせバ齋明よりて求めにいさし
見きバあやしのりしるして有まがふべくもなき保輔が手
跡なりしバいよいよ心とけて陣中にぞ留置ける夜明て梅
丸所々見めぐりありきしのびやかにはじめより事をはかりつる
その日も暮て齋明梅丸をまねきて酒などすゝめ保輔が
陣中の物語などせけるせておのれも飽まで酔てうち
ふしける子の時ころ俄に陣中に火おこりぬとさ
けぶ齋明おどろき起出て見れバ陣中四方に火燃あがり

たり城中の者どもさつぎてうちけさんとするに、折ふし風あらく吹て炎はげしく盛りえ上りければ、ぜんかたなく我ちからも門をひらきて逃出しぬ。保昌ハ四百余騎に大手の攻口を圍ませ手勢の中にて齋明をよく見知る兵八十余人を勝て搦手を〆る事二十町余の間にての田の畔しこの木陰に五人三人づゝ伏かくし組に一人ゞゝほら貝を腰にむすびつけ、齋明と見るならバ貝を吹べしと其時八十餘人の兵一度によせあひていけるべしとぞかまへける。此時齋明城中にありえども信濃路へとおもむき郎等二人具して遁れ出や十五六町落のびて城の方を見返りければ火さかりにもえのぼりて敵味方の鬨の聲矢

さけびの音おびたゞしく聞ゆ。さしもの強盗もあわてふためきて、行まじき所に待つけたる保昌が兵あはせの貝を吹立て八十余人集りきて齋明を中にとりこめ、ひしひしとひしめきければ、齋明いまハかなはじと死にものぐるひに難なくふるひて戦ひけれど梅丸が射る矢眉間にあたり眼くらみて遂にからめとられけり。保昌斜ならずよろこびて明る日都へ引べしとてきびしく警固させけるが矢傷ふかく重りければ明るを待ずしてあへなく死せる。賊等多襄丸調伏丸夜叉太郎金剛二郎なる頭を断て齋明と共に梟木にぞかけられける。此度の勝利ハひとへに梅丸が軍謀によりてとて其功を賞して官軍みな感じあへりけり。猶のこれる残黨もあるとて、あまねく陣をひらひて、そ

日を過しる。齊明が一黨亡びうせれば近郷の百姓等ほとめて安堵の思ひをなし山たくよりかへれる者ども資財道具を運び返しふるびりとの家わかよ帰り住てひとくよ保昌朝臣の武功をそ仰ぎたつとびる。共特梅九八郎等拾騎ばかりひきつれて保昌ふもとの豆びひそうに神崎の里よりて常人が家をうかがひ見るよ。安世が家を我物とれしもとべるどいのりいめしにをひて。鼠の無き間の貌ばかりとうくよ爲よていとくゆきうにくくし居るおほくの人なるばかくぬひびとのちびこうるせるたやすく家居ありておほぞうみく住居などすべきよりねど常人をはよかれらが社よ入て臓よ入てをくいれずもさきば同類のなるよかぞへられく盗人どり手ざい事をとび。

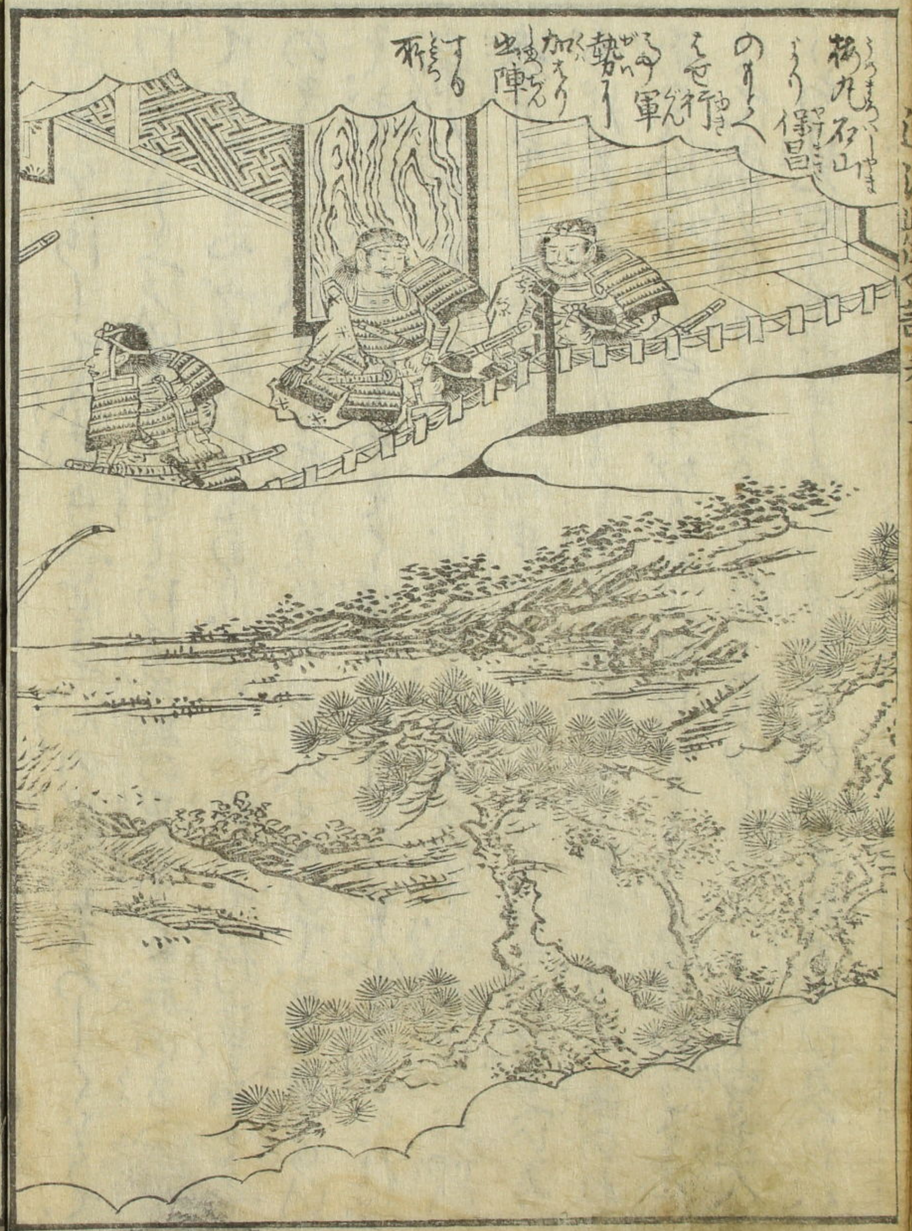
金剛ぶりとへもこぶねわまくつらうてびてそれが慈よふける盗人をしれどやどてうけひきて罪をゆるしてもくくむつびうるとおり。梅九二十町ばかりこのあまて衣服ぬぎうてうごき居づきやくそらにる麻の衣着てぐいとり常人が家ふで往る。案内をもて梅九をそ来ていまいうべきき身とおりてゆくどなくひえる田樂を舞てうよのいとるくとなくくいうで見参よいくどやと存てつぎと参りていといとせる常人聞て菌生が事も少るなほくなれど呼いれ對面をおくつねいまは田樂をりてたづきとなれとや先きうまはしたる菌生なるハいうよりしつねしの妻とすくりおくしのうにきくはるるいよくくさくにやとりて梅九からくどて菌生をあが

なりひとりて宿りまでめしつれてゆけらど其夜盗賊の入り
来ていづくへか奪ひ行てゆくへもなく成ていとうく常人初よ
思ひるはちてハ我いひつけやうしやう俄よ異心を生じ前
生を奪ひうばいおのゞ物とゝ他國よ落ゆきるやうんいうあとそ
とり返さどやりどもひるゞ物ぢつぢりて梅九よ向ひて
さてくんづるき事を承りていひさぐまそ見参よ入あ
ゆくどのどうよ物語もせまほくゆくども、そりやーちりがさた
まうくどのきあひてゆくばまさを對面あちくめといひあつ
たちて入くんと次奥の方ハ人あまくむしかてみぎうく
笛鼓なくしてあちやひ梅九常人が袖をひくて客人の
ほ入り彩しでさいちひくそれじが田樂のひとそみづうよゆく共

一かあでは覧よ入くゆくとしいくで常人うかづきてこれ
おぢくゆく奥の間よハ田樂する人くゝ両三人せくゞ置さり
堪能なるハ吾ゝる所ありちくばともくちすひ浴くゝ
宴席をさきけあつれどいひて田樂どものなくひとる郷
の肉へともなひて入ねそれりさあくの田樂にて終りて梅
九ちくさくだ出てぜんず萬歳の酒ほくとりく曲をおりく
ろく舞をどりて見せらばば潭空無よ入てゆくの田樂ハこの
人よつきはうり異人のハなくにとざあくさりとてきり
ゝ梅九をほくのくりて今ひとてうべくんとをとひとする
せむ常人郷屋よ入来て客人のいくうでくゆくばいとと
あび興あくとちくく見せのくとりよ梅九おのれちうはちくさに

はたらく田村将軍といへる一曲さうふこれを第一番とす
入まあるこれこハ後巻にて出てハ鎧かぶとうしろびきの
常人何心なくわりごろよ入てねすまこうる鎧うぶしりち
出てはうしれたやがてよりけひさうぞぎて立出く深すゐ
ちてすぐ山の賊徒さひげをを詞よつてて聲わりく
のべるとこるの人おりしろぐりて身をすゐてを少ねうるかる
了表のうゝ俄ようさわぎて何ごとぞと問ば大将軍
保昌のそん入来りのうゝ常人おどろきていとさる
事あるんかと門さぐもておもしるあやなどいひつこしばの門の
とくあるうゝ士卒らさちのびて鎧のうるのきくゝ考り
ちのひて燈ゆどのとびかくやくに見ゆ大将軍馬りわりの入て

我家をたちて入来りをとて心の兎ようをうしくなりて
ひれくくとうひてをり有とうる見物の男女うる庭の方へ逃出
て垣かゝりやぶりて出るもあり又いたちゆりて何事ぞとく
のぞ紀をれるものも有り梅丸常人よ向ひてさわ驚のひ
そかのしいむひてやをく保ゝ中まゝせんとて立あがしば
常人鎧の袖をひくゝこのるあのひそ大将軍に向ひ
奉りてげその身の物申べきこゝかわるぶりて我さいみ
ぶ紀罪ゆやおうんとく外へ逃出すとりて歯のね
あつびさやうにうゝがりうれひれくうらへすかてこん
とて常人が手をうをひてのどくとのゆして出る常人
うち見やりてだまゝひも身よそび一定梅丸め引きうし


梅九石山
衛昌
のすく
とを行
軍
勢
加くより
出陣
する

てうきめやうらんさもあらバいづれ大將軍の何とて変ぞ入来あつると障子のひまより覗きゐるに梅丸表のかた出て會尺すれバ大將軍座につきゐけれバややあつて禮をなして梅丸ようちむかひせかひ何事か物語ありておもひ出人耳をそばだてきくにかくも聞へねバ大將軍の御声ぞきこえもちねより見足をそへてかとの孫御声ほのぐしとゆいよく心もえずうかゞひゐたるに大將軍又声きこへたまひてかしこ待つけ奉らんとて座あがりて出ておわせしハあたらの軍兵左右よなからびていとゞしく警固して出る行梅丸ハおくりまいらせて立帰り奥さまに入て見るバ常人面ハさながら主のごとく成るくぼうちつけるひそり梅丸うちつらひていゝに常人汝我

師のをしへを守らバぬすびとよおちあふれておかしかざしの名をさへながしつひにや我師安世どのゝたからとせし相傳の御きせながハ此鎧にてあるらしいでいよく贈つかれてさてハをぬすまれぬと思ひて逃出んとするを梅丸声をあげてそのども来りてかこめよとよばゝれバ表の方より士卒十騎ばかり入来て常人をとらへておさへたりてこそまこりたりげの梅丸いひけるハ我ぞじめより名のりて汝を捕へんたれど汝逃かくれのかれしバ此鎧いかにあやすびんと思ひそりて捕らへいかにたるかりと云へぞ常人恐れて魂も身にそハバしでものねほらんにて云るハ扨ハ汝儀まかりのぼりてつりさをもとめよればいって薗生をも吾妻となし汝も安世もなき物にせんと

男ひとりにその事ひとつもかぬいで鎧ばかりをしつくらせつくらせ
ちゝはゝ夢まぼろしもかくやとぞ思ふ。その鎧水の底にも沉免。
火にも入れ焼てまし。を吾てぶくりて出く。後より是を追
せ。ハおさはきまでおろかなりしといひて足ずりをして歎
ることひ。梅丸ハ田樂どもぶうちすて置る扇とりあげる。
おしひらき三尺の劔の光ハ氷手にあるとだやうにうひんば
郎等どもく笛つゞくおどてんでよりて一張の弓の勢力ハ
月のあらはれたるひとやして一度よろと矢ひて出る人ゞ
縄をとりてどよめいさて出行ける。後よきけむ掌人は
公家の出さとゝてきらゞ嶋へるゞつらさしるとあん

○ うんげ

ゝて尾張よりあり。嵯峨の左衛門ハ梅丸よりひつけ。
都へ出ゝてやりて後やまひとゝてるゝ。大宮司
来りてひるハ。新光朝臣より。定綱より使のりて國ゝ
源氏の出家人ゝいそぐ。賊徒をうちろぼし
べきゝ。御詔ありて此國の武士ゝ。その支度をしれ
はくをかしのひ隱遁の出身るゝ。かゝる時ハひきこりおそひ
ゝ。ひとをかしのひ。うさちのひて函徒をこしあんきゝ
き物の具ハ所持ちてゆくバえらびくせ。月ひうやうと
いゝ。九郎門ゝおづきゝ。くくこを告のひつて。我老ゝりといふ。
みもく朝敵とあるゝ。見のがゞきまゝ。いそきひより
むひあんとてをゝ。武士を催促ゝる。三百騎計を

集りて、陸をゆくに日数かゝりぬべしとて、そびつぎの頃、
船よりのりてゝ、ぢちよ伊勢國よりいきほひ猛くよせて
ゆくかゝるに、源氏の武威のおそろしきことゝ、きくおぢ、
如くびとゝ、軍勢の向ふべきくうし、蛾の子をちらすが如く、十
方へちりてゝ、処うせるゝ、たゞ少つ軍勢かと下知をして、鈴鹿山へ
と向ひゝるゝ、きのゝ高島の柵やぶれて、齋明その外、ゆくゑ
たのくさ、ゝ者ども、ちりくくに、おちて、盗人とも
さわりあへび、如法貪慾のこゝろ、一旦ハ従ひ、ひきゝれと、
かく危急の時よりのゝ、誰ら八一人も踏とゞまりをるべきゝ
いひあせるゝ、ちりぐくよりて成て、落せぬ、今ハゝ十騎ば
かりそのこりたる、袴ばれ、ひるハかゝてたゝかるゝ、見いくさ

せん事かなしゝべくゝび、敵のちづくるほどよく落ゆくべし
とて、十人の者ども、ゝ鎧ぬぎすて、簑笠ちきていづく
ともなく、処出てゝ、行けるゝ、さしど天命、遁るゝ所なく、諸旬ハ
京都において、四天王のゝ、命をかゝるゝ、ゝ、ゝ、
尾張の國の軍勢ハ、柵ちく責ゝ、鬨の声をあげれ
ど、出れ、敵もゝ、人ことにいれてゝ、ゝ、ゝ、落せ
てゝ、とゝくゝ、先衛門下知して、火をうけて、職營
たせかちゝきうして、都の方へとゝくゝ、ゝ、藤原の
保昌ハ、近江の賊をうちたひらげて、後九といざなひくゝて、保昌
ゝ、奏聞をゝ、逐れバ、教感ゝ、ゝ、ゝ、
をば、丹後守よりゝ、拙九が文武のゝ、ゝ、

盜賊の大將
義家
源明
おうんとゝ伏無ようらきしを

近江様おぞやうしれる。各朝恩のかゝぐけるをとて拜謝
志奉りて退きるゝ。そのゝち梅丸ハ保昌のそんよりひきつゝ
頼光おそんの内舘よりるゝ門前よハ尾張の國の
勢いさゝ。げよやうゝびてをとり。梅丸門をうて見れバ
ゆりる安世とく〳〵愛よありて。出むかへて。飯陣のゝうゝびて
のべゝ傳来の具足とりゆへ〳〵つゝ事。ひとゝよをそこのいさを
なゝゝ拵びいひてゝゝゝ我娘老母をもめて来りて。五舘
の内よゝゝゝ置ゝり。先御見参ゝて人〳〵ゝ逢ゝとゝ
うちつれざちて。頼光の御ゝ出ゝ。頼光おそんゝ見
ゝゝゝり。梅丸をゝくゝゝゝりきつゝ。ひとゝのゝ功ゝて。近徒たひゝ
きめる事。保昌おそんのみゝて。つまびゝゝる知りぬ。今日朝

廷ゆて近江様よ任じ給へるこしゝ。今のほど少なびつさこそゝろ
こぞゝゝゝゝとのゝ内へで。梅丸頭をさげて。これおのれが功よハ
ひをびひとゝよ君の御威德のかゝやける余りよゆゝといゝゝ
やハいさてゝゝゝけゆひてゝ。これ梅丸よひとゝの望のゝうけ
ひくべくやとの後梅丸ゝこゝりて御諚でゆへバいゝるゝを
なりとも。いゝゝゝ奉るべきやゝゝゝをびとやせバ我家よ譜代
の老臣ありいまハ自余よ及びねれど。嗣子ゝくて。明ゝれ
是を慈ひをゝ。つどのゝうしゝ子と成て終りを見とゝけ
やゝんよハつれも又ゝりゝゝゝびこれよゝゝゝゝゝん。
とのゝゝゝへバ。梅丸ハ辞すまいゝんやゝハゆゝねどちきよ
旅舘ゆて親子の契へなせし。老人のゆへバまゝも異人を親と

ふかん事、義よおいて安らびゆへハ此る計ハすくやうにれ答仕りく
くゆといらく、頼光さてハせんさ、ゐ、ぢまでつどのゞ如き若者あ、る
事、老臣どもにと見せぬやと思ふさそれくとのゝまへハやゝつぎの
侍ひきつれて出るをこしハ大紋よさてゐぼりきてたゝ巻ゐる老
武者ゐまへよ出てかゝこゐる頼光老人のゐぐちにゝき若者と見せ
むとて呼出ゝつるなり此若武者こそ此度近江の強賊齋明を
計ごとを以うちほろぼゝ未曾有の高名なゝたる者なれゝ見
ゐりてゐれとのゝまへ老武者するとち頭をあげてめをあぼりて
見やりるゝ驚るきたのとてくやおれ梅丸よそとい子梅丸うらを
あげて見るハ尾張ゐて親子の約をせゝ嗟嘆の色あり名れを
たのゝさおどろきて親人いでとくゝ都よハのぼりゐひゝいるゐれぞち

そ、ずくやうにかくせるひつやゝ藤行
ゐゝぶりのひてさてハくゝ親子の契りをせてこそ思ふずかるゝ
つれるゝだちもて父子のむせびさせてんと思ひゝハおそりりと
のゝひて侍らるゝびゝ斜ゐゝびゝふゝびゝ梅丸よのゝまひるハ此りのゝそ
我家の老臣ゐて藤原の仲光ゐ勇まて季光といる者ゐれ年比
嵯峨野よかれ住てあるゝ父の殿ゐもひさくくつゝて無二乃
忠臣ゐりゝらばつれも鷹狩のついでゐれをさらうてさゝびひ
おどゝれゝ事もあるき。このゝびふゝぎに尾張の國よありてかゝ
ゝり責のぼりるゐハ我さくくゐぐりて知ゐきつどゝくゝ父子乃
やくゝを約ゝ結びゝ事ハ我心よ符合ゐてかゝりゐこゝりた事ハ
ゐるゝびゝゐるゝこびゝ大方ゐゝびゝ季光つゐんでゐのゝまくゐく

はじめて逢しより親子のちぎりむすびけるをかどあるやうに語り
聞てふかく思ひかけなく對面なりしも偏に君の御めぐみなりとて
かしこまれば頼光うなづきて今の程安世が物語にて聞けば家族の
ともがらどもめでたきよし。なうて呼いれてのどかに對面すべし。
われハ又新發意どのゝもとへゆかしあふやおもふすべきとみりぬるを。
奉らんとてたちて奥の間へいりたまひぬ。安世そばにて悦びて娘薗
生を呼いれて。季光に對面させらる。季光薗生がかほのすぐれ
たるを見て。おそれながら妖の君をまうけつるとてよろこべバ。梅丸。
薗生に向ひて。袋のうちで君ハなどてさりがたくはべりしといへで。薗生
かしこの一間におはしませし伴ひまゐらせんと申すへどかなる心のうちへ。きき
身ハかしこを見れあそりへハ。そのなりけり。かつ松のおもちをんとしてありけり

うしとの縁につけて。すゝみひて出もやりかねつれバ。ひとり参りてゆくと
ひて。梅丸安世にむかひていひけるハ。さきに石山にて初めて殿に見参に
入し時。わが君我姓を坂上と呼びしハ。本姓にハあらねども。しばしききたまへ
事ありければ。くはしく語りまゐらせんとひつれど。出陣のさわがしきにまぎれ
ておもひまうで出さでありき。我本姓別にある事。これをきく人しくからず
かゝるせんへいくへで安世うちわらひて御辺をさなき時なれバ知りたまはじ。
かの田樂法師にて世をわたりし坂上の猿丸ハ。御身のまことの父
にハあらず。きくハいかに。梅丸驚ていかにと眉をひそめて。さへぎりて今ぞ
二十年むかしなりけり。猿丸田樂して都にのぼりて三ッ井寺の
みどり子をさらひてかへりて。これハ旅にてひろひたりけり
とて乳をもとめて育てやしなひけるが兒のおもかげをみるにもさてこそ

えし子ありといちぐ。なぐ〜しく心もいでらん物ぞと。ちゝ兄人に
はくゝめてそのゝ〜児をもかゝるも世ざりき。此事ありうハ我の
ありぐ。一村のうち老うりのハゝおうくゝうてをうそ。その時のひろひ
子といふハ近辺をさらよ。ちうよ。ちきよ。頼光君の姓氏をとゝ
ゝ時いつゝりて。やゆべきあゝねで。つゝまで申つゝく〜語るちゝバ
我が姓ハ化けゝりて。問あきゝゝゆべきやしいく。安世ゐれも又
ありえぐ。うゝぐ。出ゐよかゝをとてのゝ〜つゝ。猿丸が一品をそゝろ
おくゝれ。ひゝきて見ゐへとゝ。梅丸菌生ゝむゝひて。例の品これ
へとゝ。菌生常にかゝりゝるゝぐりゝてゆゝども。只今これ〜ゝ
ひとて。西念法師にあづけをてゝむゝゝとゝ。安世ゝうげて。西念
ちゝゝくゝとゝぐ。待ゝりつゝぎて。西念をあてきゝり。梅丸西念がちゝ

代長物ゝりて。封をひゝけで。三重計よ封じてゝりゝわけてゝれバ。
一通の文ありゝハゝきよ。梅丸どのゝ〜猿丸と書ゝり。ゝゝ見れバおのれ
ハゝとこのまゝとの文をゐてゐをぐゝ。千康保元年三月十九日。山城の国
舟岡の山ゐて。ゝゝぎにひろひ丸て。云月てやゝ〜ゝひてゐ。ごゝよ封し
置〜。筋ハ其時ハ身とゝもに。ひろひえし物ゝりとゝゝゝあぐゝり。
季光のびわゝりて。何とゝゝくゝとゝ。ゝゝたつゝ。梅丸ゝゝゝみしば。生
長の後。まゝとの父母よめぐりあひさまえんゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝく置てゐゝり。とゝゝゝをゝゝゝ。梅丸悲歎の涙よゝれゝゝゝ。
ゐのゝゝゝび筋をゝゝゝてきて。ゐゝてゝまゝとの父母の法ゝゝ
ありゝとゝて。身よひゝゝくゝとつけて。後おゝ世を養ゝ。ゝゝゝ
おりゝちゝゝ。その筋ゐゝ行ゝんせのゝゝ。手よゝ見てゐゝゝ我子

愛丸が死しける時ゆゑ埋つる筋のれいなくその類のうるはしきをとめを大きにあつて不審すれハ安世うちきくより此筋おくなりのひし兒のうちせて葬りもつるとなる猿丸が遺言をあとせて年月をかぞへ見れば是ぞ此この猿丸みてハあらびやといへで季光かるる愛丸と名づけし兒ハ此梅丸なりとて兒をふらくほうせてうづめ葬りつるとば。

ふりかたとてうつびけ世よ出べきよあらびとりさるにくこと此筋はさしく梅丸がりとにありしこそうえねとてくうらう手くくて頭を傾つひぶくくしひねるよ西念うちろ

をりて聲うちあげて南無觀世音とたくかよ唱へるを人くく驚てうりむき見れば西念赤かちのやうなる涙を滝のやう

よおとくつすくくと出て云るハさてくくもつきやうの事をかの之に見てハ事うるに人くよりよりくもも老法師が例の恥辱し存られ迫ハつくくゆくもおのれが恐しくそうんよハくくの此不審のるくくた道理もいとねバ恥をすてくく過ちもつくくむし物語竹ゝ奉るに愚僧男ゆてハ時ハ狼冠者と人よりそれ山城の國田原の郷よ住くゆひるがのけれ博奕ゆのくく心をいれて放逸無慙のやまひのくく仕り親族一門みも見たるされ乞丐の身となりてくく舟岡山のほりよりとひてハ時康保元年やひの比ハうどれ人のとこるの子の野べ送りありて玩物調度金銀うくく極うどのよくきて俄よ例の慾心かり夜よまぎれてかくくあれ至り人ゝねはどよりうかちて調度の類ハ色よかくくいと持

帰らんと存ぜしが、幼き人の死骸の腰よ物のゆえてゆくゆえ、引ぬきとらんとのうせしに、思ひもよらぬ此児のうごかして泣わめきぬ。をとゝうとおどろきて、旅人のきうあんバ見つけられしと思ひたるよりかの旅人、兒をいだき、包をあひてゆんとす。やゝどろめて、おぢゝ程うちあひてゆくときやつ強力の男あて、おのれをとろて、四五度むろ、ほゝど投てゆく。塚穴の中よりおちいりて、うゝをとるゝ。岡絶せるほど、兒と包をひきくいづちゆゑん。影も見えず。猶のこれる物やあるとそこらうちゞりて見てあれどもいさ兒あだの手まあるりのまゝこれを両の手よりちてぬさりぬひそ喝てい其夜の暮よ老僧一人来りのひてひあゝ大事とゝく秘めおくべし。おのれ成仏すべき因縁あれをいまゝり行ひを

あゝ兒、發心修行すべしとの給と見て、夢ハさめぬ。それより ひさすゝの道心者し成て、料機修行してかくてうあひ物ア。 物ハ其夜の旅人ハ坂上の猿丸どのゆて掘つぎて兒と申ハ猿 丸君ゆてでおもゝる。吾ま〻梅丸の天よ命さすけられしと おりくじやうぎの因縁ゝとて首よかけうる包ひゝきてらひさきあ だゝり出て見するを、季光ちゝく手よとりたのげてそれを満仲 の君ゝ兒ゝ〻ゝ物あれありてよかゝ花をさぐきたる人、 巨勢の廣高ゝ筆のあとゝさてハ養子と思ひ[illegible] ゝ我肉身ことゝ子ゆてたりるゝとて[illegible] なく。梅丸も手をあゝせつて思ひ[illegible]の親よめ[illegible] 奉りゝ事、神明佛陀の内加護ゝと、新子亘よ手をとり

かたらひ、さめざめ涙をながし、季光目をさめて、二十年まへに死にしかと思ひしに、我子よ、かゝるべきためしハ、貴賤の浮木、うどんげの咲出しかとハ希有の事なり、たゞつれなき姫のゆくへまでなつかしくありてかゝるれもきむもつよはのこゝまで、くゝるべきかりそめ、をぬひとの、えよろこれていのちなひて、ゆくへをしらぬよとなげき、梅丸一目の孝をもなさんとて、ぶに拝し奉りしハいかゞる宿世ぞやとて、あるをあげて、泣いとびかゝるに、ひとゝのうちさつぐ、うゝくとなく、老若ハ何者ぞとて、安世障子あけて見れバ、代衣のうゑ、ぞうゝ、うちつれて、前後もちゝびなきけちびて、ものもうねべく、おしもづくをり、安世さちより、何事有てさハ法師をといくゞ姫頭

をあげて、季光どのかゝるやとしく、季光又おとろきて見るに、しばらむつびうえせし、我妻なりいかなるくてありるゝ、聲ゆゝしくてうゝ、梅丸薗生もおどろきてうち守りをれゞ姫涙を、おさへてがこのひとゝをあてたゝるひめうしでなのやゝ兄詞のちく、聞てうゝ、今のほど障子のあるさまをひろ来てうかゞひ、ぬてゆくバおりひとゝげる物語ゞもてうしさの胸よせるりて、おほへず色をあげて泣といひて、梅丸ゞりとにぬぎりうく、他人ありとゝきまでも思ひハ我うみうる、梅丸ハあるりよ思ひびある事ゝあ、よくてそりつきてなく、梅丸ハあるりよ思ひびある事ゝあ、色バくあきれて詞も出ず、季光もおなじくのきしれる者、にくく姫よりひとゝかことハ盗人のさゝ兄よくびきしれて死れと、

季光安世一家
うちそろひて
頼光の館にて
親子對面
ひ各功有
して頼光
ほめられ
て一門
栄花を
きはめる
所

家司なる兵藤大夫が物語あて、少さうして此世よりなる死人とのこと思ひくまありしにいうで命おがらくてありしいこで姫御前の
ものうさよぐりのひし後儀よ盗人の入来しばうらくく。
逃出んとせし時愛丸がめのとある右近ごびきとぶりて盗人
をものうでありとうんばいうくせめて財のありかをいはせ
物あていたやくくその衣ぬぎせあひてげす女のうちて出させ
とをしへうばとりとらひてうりやまみし下女の衣うき
かくてのはて迷て逃出ぬかのめのとなる右近い我ぬきすてし
ひとぐの衣とりてうちきうりるぐちてハぬすん人よあひく
こうさしあるうんめりのをしれ我命よかをりて死うせしこと
かハゆりしそ又袖をうほまあくくで泣ける。梅丸ハちあハ

海ことの母人よをおりをびしたる不神をのくく住りき。
とて額よ手をあていふ季光かさねて問けるハいるる事にて
はこそハ今日この出館よ入きて有しといへを姫君ハのごひる
えうらびぬすびとよりくらしてうきめうるを梅丸来りく
ものるひ半ばくまで母とあ申てあぐ兄やしなひうとかく
きた。季光手をうちていしも梅丸を實の子としいあくで
義子の契りをむすびたる。其所ハ陽うしおとも又彼せ
かりの子とせしハあぐさといあもあまりのりといへで姫君
うる親音の声つるりとて手をあらせてかつぐをぶむ
色しもし初衾よ通夜声つる時枕がくよ立おりてやしあハ
れんことハ安しと告すひハ今ゆくすをのるのるべしとて

夫婦やうやくまなこを合てよろこびけり。梅丸ハ膝うちたゝき。天を拜みてよろこぶ。薗生ハ光母をいだきて脊をなでゝさすりてなつかしひ物す。安世かたかけより出てめづらしといふも何まりある親子の御對面かなとていさゝかめでたくひとつうけぬへしとてなへくよりて季光にすゝめおの/\ずんながしの酒くみかはしてよろこびけり。西念いひけるハ。梅丸君と薗生君いまだ婚姻の盃あらざりければ。このついでに合卺の禮行ひ給ひなんといふ。季光いふて今までかゝる事をもせざりしと只媒とは何まいつもすゝめひつれど。只君にあつ世奉らんとでけるまゝ行ふべきうへハとてかくはからひまゝうけひかざりしと語るがうちにおのおのうけず。母ぞその障子ひきたれば人々見て

あれバ御ありし頼光君打あふて立出給ひ。侍臣の面々ついてかさねに土器のせて持出るもあり。又すゞの臺持出るも有。外にかれのさかなとあまた持出て人々のまへにならぶ。さて頼光のさまいろいろ。婚姻の禮媒にかはらず物せずと宵おもふ我なればとひとかりてなにか朱陳の禁をやんとすとの給ひけれバ。人々かしこまりて頭をさげあげてよろこぶなり。頼光侍臣に仰せて梅丸薗生にかはらけとりくはさせられけるかちあけてなまふと今日の祝ひとぞひ出し給ひ。臣の人々もとりどりいはひてよろこび祝ひささき乃聲も心にさ殿のうちにかけになりて人々よろこぶ。滝宮あることえて頼光人々まのさまいかるハくれして事ハ障子をつぐ

てきゝすなハちそも彼の親子の契りなせしハ返りて後との
親子なりし。これ希有の因縁なりつゝてかゞ他世の物語
ともすべらんめり。薗生が賊営にとらへれしも成ぐ智を以ての
身を汚さじ。再夫にめぐりあひしハ。女中の丈夫ゐことを
安世が娘といふべし。梅丸よくあそれをてながく老を偕にす
べし。梅丸が文武に長じたるハひとへに師の安世がをしへの厳
なるによりけりかくて一家に家をひて終身ねんごろに
孝養を尽さるべし。めのとの右近が主にかハりて死したる
返りしあそれなり。西念が発心のそゞめハ観音の志なる
見てあるも陰府の堅固なりしるす。尋常の法師にことを
なりかれしが生れ出る田原の郷ハさいそひ我志る領所なり。

かねて又新発意殿の宿志にて一宇のがらん建立の心
あれしむかしこに一寺をたてゝ西念を以て住持となし。右近
が亡霊を弔ハしむ。又梅丸がひとくなりしハまさく観音
の霊験ありしなり。猿丸が慈心のたぐひまたわすれがたく
こゝろなれば洪恩なりかれしが遺言の文をうづめて塚をと
きづきて。其あとをのこしべしとのたるかさねぐその詞
まんて人ひとくハよろこび泣に泣くをいふもあハれ。袖をしぼ
りぬざるハ末の世までいふなりて猿丸塚。又猿丸が峠などよび
掛けて田原の郷にその跡をそのこしける。梅丸それより父の
住ける白河の家を修理しつくろひてうつり住けるに安世季
光がもとにありし。郎等女ぞなども所にまちりいづれつり

ものゝ聞つゝて、ひれもゝと悔りきてつゝられぬ。むつ
にいまきりてゝぎそゝくぞ成る。かくて季光安世を別室
に住せ、朝暮孝養をこゝろびちていとゞき子どもあ
まゝゝつゞけてつきゝゝおまたくすゝてゝりとせの栄
花をきゝゝ。ゆゝでゝゝ一期を過しるとかん此巻くの
草子をあつけて、近江縣物語とゝぶとゝ、物九が任務よ
ありて、人ゝゝ語りるをそのまゝにうきつけ畢

近江縣物語卷之五大尾

六梅園のゝゝ孫より帰りぼれくのちいつ
ア紀為常ゝより為くゝ神ゝきちゆゝ為ゝゆよ
こゝくおのまにゝひつをちこのりてゝゝ見ぬり
まこに北ゝゝ異ある事とも世おほゝ紀ゝ仏と
ゝし紀常乃常つゝひゝも小もゝゝちとひゝる
おとの祭りてゝけゝれしゝ世ゝ人のゝゝ
ひんと表ゝゝゝえやもゝん学光とゝやゝゝ紀
可ゝのゝゝあゝゝ紀物語とゝ世ゝゝゝ

[illegible]まめなるあだごとの歌をおもひて書つけはべり
けん此物語は翁の[illegible]
[illegible]人の[illegible]
[illegible]
[illegible]ありけるにそのあらまし[illegible]

風興亭高綱[illegible]

二代目福内鬼外先生著　北尾紅翠齋画

泉親衡大島軍記（いづみのちかひらおほしまぐんき）全部五冊

當正月賣出し申候

文化五載戊辰春王正月發兌

東都書林

通油町南側　耕書堂重三郎

大傳馬町二丁目　瑞玉堂安兵衛

芝三田三鈷坂　螢雪堂宗兵衛

山下御門通南鍋町一丁目　宇多閑[illegible]六衛